

主語が周到にぼかされている

京都大人文学研究所教授

山室 信一氏 (法政思想連鎖史)



歴史的な出来事を羅列し、文脈のつながりが読み取りにくく書かれているため、「反省」や「おわび」のメッセージが希釈されている印象を受ける。その

「反省」「おわび」も、「我が国は…表明してきた」などと主語が周到にぼかされていて、自分自身の謝罪としては語っていない。村山談話のキーワードを用語としてはそろえているが、換骨奪胎され、まったく異なる内容になっている。

例えば、満州事変以降の歴史については、「国際連盟からの脱退」「国際秩序への挑戦者となっていた」と傍観的に並べるだけで、「日本が中国大陸を侵略した」とは言わない。「植民地支配」も同じで日本がした行為への事実認定を巧妙に避けられている。

「戦場の陰には、深く名誉と尊厳を傷つけられた女性たちがいた」という文言は、従軍慰安婦を意識した韓国へのメッセージとみられ、この点は評価できる。ただ、ここでは「傷つけられた」と受動態で表現し、誰が傷つけたのかを明らかにしない。「戦場」で一般に起きることとして語ってしまっている。

全体としては、予想以上に「反省色」が強い言葉が羅列されている。おそらく、全国戦没者追悼式での陛下の「お言葉」との整合性を意識したのだろう。しかし、「心にとどめる」「胸に刻む」といった情緒的表現が目立つ一方で、具体的に何をするのか表明されていない。

談話の終盤では「暴力の温床ともなる貧困に立ち向かい」などと、積極的平和主義の重要性を強調しているものの、続いて「自由、民主主義などの基本的な価値を共有する国々と手を携えて『積極的平和主義』の旗を高く掲げる」ともめる。これは明らかに「中国とは一緒にできない」というメッセージが込められており、結局、現在審議中の安保法制を正当化させる「積極的平和主義」にすぎない。